活動状況報告（9 月）

文化芸術コース　４期生　北浦　由花里

9 月に入りポーランドの気温は一気に下がり、秋が到来しました。北海道と同じくらい肌寒い毎日が続いています。ポーランドの気候は、北海道と似ているとよく言われますが、2 年過ごしてみて本当にその通りだと思います。遠く離れた地ですが、私の生まれ育った北海道と共通点があり嬉しく思います。

先月は自身の修士論文に集中しなければならなかったのですが、今月はピアノの卒業試験(実技)に向けて力を入れて取り組んでいました。この卒業試験は 90 分で、弾き終えた直後に論文に対する口述試験が実施されるので、気力も体力も必要な試験になります。この試験のために、師事している先生が有難いことにたくさん補講をしてくださいました。通常はワンレッスン 1 時間程度になりますが、たくさんの作品を演奏しなければならなかった為、一度に 3 時間以上もご指導いただいていました。

90 分のプログラムでは、全部で 9 作品(そのうち一つはソナタ)を演奏するのですが、その中で 4 作品をフルデリック・ショパン(Fryderyk Chopin, 1810-1849)から選びました。アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ(Andante Spianato and Grande Polonaise Brillante in E flat major, Op. 22)、ノクターン ロ長調 作品 9-3(Nocturne in B major, Op. 9-3)、即興曲 変ロ長調 作品 51(Impromptu in G flat major, Op. 51)、舟歌(Barcarolle in F sharp major, Op. 60)です。これら 4 つの作品は、全く異なる音楽のジャンルで、それぞれが技巧的にも表現的にもとても難しいです。ショパンを専門としている先生なので、今月も多くのことを学びました。

今月先生から学んだことは、二つあります。まず一つ目は、書かれていないルバート(※テンポを揺らすこと)を楽譜から見つけ、表現するということです。「ルバートを表現できないなら、ショパンを演奏しないでください」と言われてしまうほど、重点的にこの表現についてご指導いただいたと思います。楽譜に書かれていないルバートを見つけ表現しなければならず苦労しましたが、「ショパンはルバートで弾いて欲しいところは、しっかり音符の長さで表現しているから、隠れルバートを見つけるのがあなたのすべきこと。」と教えていただきました。また、「自分で実際に歌ってみると、ショパンのルバートを理解できる」ともご指導いただきました。それは、ショパンの音楽が歌えるように自然に作られているからだと思います。細かい音符が並んでいるような箇所は速く弾き飛ばしてしまいがちですが、自分で歌ってみるとそれは不可能なことがよく分かります。また、音程が離れている場合にも速く歌うこともできないので、ピアノでも同様に時間をかけていいでしょう。そして、ショパンを演奏する上で何より難しいのは、「旋律はルバートで十分に歌うが、伴奏はそれに付き合わず演奏する」ということです。これは理論上不可能ですが、ショパンが求めていたことなので、今後の課題としたいです。

そして二つ目は、ペダルについてです。ショパンの舟歌を演奏する上で難しいと感じたことは、このペダルについてです。この舟歌は特に、ペダルにより作り上げなければならない響きが他の作品と異なり苦労しています。教授によると、「この作品は、pre-impressionism(印象派)にあたる」ということで、かなりペダルを長めに踏むよう随所で指示されました。ショパンはもちろんロマン派の作曲家でしたが、次の時代にあたる印象派音楽を予想していたのかもしれません。このペダルの踏み替える場所の違い一つで、全く異なる響きが出来上がり、とても勉強になりました。

ポーランドに来る前はショパンが一番大好きな作曲家でよく好んで弾いていたのですが、先生のショパンにかける熱量や、レッスンの際の厳しさにより嫌になっていた時期がありました。でも、この１年間で細かく丁寧に先生のショパンの解釈をご指導いただけたことは本当に幸せなことで、今後の音楽人生においてプラスになったと思います。

いよいよ来月は最後の活動期間になりました。修士課程の卒業試験(ピアノ実技と論文の口述試験)があります。無事卒業し、いい締めくくりができるよう最後まで努力しますので、引き続き温かいご声援をお願いいたします。